

# 存在をめぐって

～存在とは自己である～

砂子岳彦

平成18年2月20日

いま、「ここ」にいないあなたへ。

あなたは、後退しているのではない。

あなたは、荒廃しているのではない。

あなたは解体して、「そこ」にいる。

体内の細胞をばらばらにして宙に浮かせ、前後不覚になって、そこに  
いる。

「そこ」は未来だ。

(山田ズーニー、『おとなの小論文教室』より)

## 1 存在は存在しない

感動のあまり涙をふきふき映画館を後にしたという経験をお持ちの方もいらっしゃることでしょ。 (そういえばあの『タイタニック』以来ないなあ) 誰もが映画の内容は実在のものではなくて映画館や自己が実在のものだと思っています。たとえ涙を流すような映画であってもその話は存在する物ではなく虚構です。

存在する物は映画館だったりリンゴだったり具体的です。それらが存在する(ある)なんてわかりきったこと。存在する物は明白ですが、その存在とはなにかということになると意外にもよくわかりません。というのもリンゴと違って存在をそのまま手の上ののせて眺めてみるわけにはいかないからです。そういう意味で、

存在は存在しません。でも空気のようにふだんは気づかないけれど存在のおかげで世界は成り立っています。

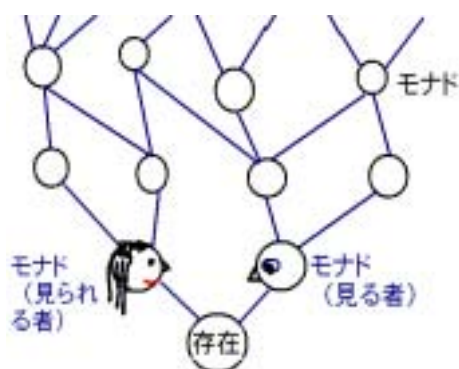
このわかったようなわからないような存在を、物理学と哲学に尋ねてみましょう。そして最後に一つの存在モデルと提案してみたいと思います。存在モデルによって空気のようなふだん気づかれなかった「存在」が顕在化するはずです。

ギリシア時代にも存在に対して疑問に感じられて多くの議論がなされていたようです。デモクリトスは物の由来をそれを構成する最小単位であるアトムとしました。ご承知のようにこのアトム論は近代になって原子の発見とともに蘇りました。もっとも原子がさらに基本的な素粒子によって構成されていることは周知のことです。この方法論が宇宙の秩序をよく説明していることは確かです。その一方で宇宙とその秩序をそれを見ている当の人間に帰して考える方法論もありました。ソクラテスの「汝自身を知れ」はそうした方向性を示しています。デモクリトスの流れは物理学に、ソクラテスの流れは哲学につながっていったと言えるでしょう。

## 2 物理学における「存在」

物が「ある」か「ない」かは物理学的には素粒子がそこにあるかないかということ。わかりやすい。しかし、素粒子は次の二つの点で存在の概念が常識と異なっています。一つには素粒子は単なる粒子ではない、という点です。単なるモノ（粒子）だったらリンゴのように大きさを確定できるのですが、粒子であり波動でもあるという二つの性質をあわせもったシロモノなので明確な大きさを特定できません。そこで素粒子は小さい物という認識がアヤシクなるのです。例えば箱の中に電子を一ついれておいても、箱の外ににじみ出て存在している、なんていうこともあるのです。もう一つには、素粒子は見なければ波動、見ると粒子として振る舞うということもあるのです。これは波動の収縮と呼ばれていて、「存在」の様子が観測という人間の関与によって変化するシロモノなのです。物理学者にとってもこうした素粒子の存在は気味が悪いのですがこれまでの存在に関する認識の変更を余儀なくされています。

リンゴとそれを構成している素粒子とではかなり異なった存在のしかたをしていることがわかっていただけたことでしょうか。リンゴを容れている世界像と素粒子を容れている世界像が異なっているとも言えます。素粒子を容れている一つの世界像（モデル）が最近になって中込照明氏によって示されました。それによると素粒子を心の様子に還元してしまったのです。すべて一つ一つの心（モナドと呼ばれています）の中でおこっていることだとしたのです。各モナドは同時通信によって世界は刻々と書き換えられているのです。デモクリトスとソクラテスの二つの流れがここにきて一つになろうとしています。



存在の階層的ネットワーク

### 3 哲学における「存在」

哲学で「存在」と言えばハイデガー（一八八九～一九七六）です。ハイデガーは世界のあらゆる物の意味が存在であり、存在の意味が時間であることを示しました。リンゴも映画館も存在という地平（スクリーン）に映し出されたものです。また、メルロ＝ポンティ（一九〇六～一九六一年）は存在の地平を意味の平面としました。意味の平面というくらいほんとにスクリーンばく説かれています。

ここまで書いていて書いている本人もよくわからなくなるようなテツガクですが、要するに物は存在するが、存在は存在しない（物じゃないから）。じゃ、存在はどこにあるのかというと「ある」といっている当の本人だよ、ということです。リンゴがある、ということは、誰が言っているのでしょうか。そうです。あの赤くて良い香りのただよっている物体の映像が現れて、自己が「りんごがある」と言っ

ているのです。赤くて丸い映像が与えられているだけなのに、その「存在」にまで言及しているのは人間でなのです。

ライブニッツ（一六四六～一七一六）は存在をモナドの中に容れました。モナドは内面世界をもった個々の単位です。モナドは魂だと言ったらライブニッツ先生に怒られるかも知れませんが、そうすることにします。世界の中にモナドがあるのではなくてモナドの中に世界があるのです。このモナドをモデルに採用したのが前出の物理学者の中込氏だったのです。素粒子の状態を各モナドの内部状態としたことで唯心論的に世界と観測者を統一することによってオバケのような素粒子を捕らえようとしています。

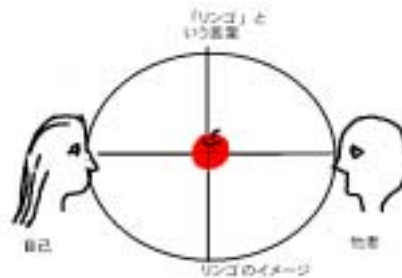
考えてみれば、デモクリトスやソクラテスから端を発した唯物論や唯心論も宇宙を一つの論で編集したいという欲求から発想したのではないのでしょうか。それは心（つまり内）と物（つまり外）の愛憎の歴史でした。またそれはリンゴを食べたアダムとイブが楽園から追放されて二元的な世界で生きてきた物語です。しかし、唯物論にしる唯心論にしる、どちらかに決着しても同じことになるのですから面白いストーリーです。その先にはアダムとイブが再び楽園に帰ることができるというハッピーエンドが待っています。

## 4 「ある」ってどういうこと？

素粒子の正体はなにか。

この問に答えることでアダムとイブは楽園に帰ることができます。それには二元的な考え方から一步踏み出すことです。以下は中込氏の説に依拠しながら、一つの仮説を紹介いたします。それは少し専門的になりますがメルロ＝ポンティの意味の平面を場の古典的空間とするような量子解釈です。その意味するところは物の存在（様相）認識が素粒子の正体だということになります。もしそうだとすると、（始源的な）想いによって世界はつくられている。物が在るという想いが素粒子の正体でその素粒子によって物ができている。つまり、円環的あるいは回互的に世界が構成されていることになります。世界の生成の場は「ここ」にあります。もちろん「ここ」とは今こうして生きている生命の現場です。居場所を探すな

んていうけど、「ここ」以外にないのは道理です。



存在をひらたくいえば「ある」または「いる」です。日本語ではその語用は区別されています。「机がある」と言いますが「机がいる」とは言いません。「ある」と「いる」とでは存在の身近さに差をつけているようにも思えます。生命の臨場感は「いる」のほうが勝っているような。ときとして、「ある」は外側で「いる」が内側にある表現に聞こえます。「ある」も「いる」も内外の仕切を超えて存在神秘のなかにあります。ここにこうして「いる」ことの不思議さ。ここにこうして「ある」ことの尊さ。「ある」ものを「見る」よりも先に「いる」。「いる」よりも先に「ある」。「ここ」(「そこ」ではない)には語り尽くせないものがあるようです。車窓から見える夕日にどれだけみとれていただろう。子供の描く絵にどれほどつきあったらう。蟻の行列にいつまで見ていただろうか。先にやるような気がして何度その場を立ち去ろうとしたことか。日常の一コマ一コマに現代人はいつも注文をつけて先を急いでいます。しかし、そんな時ですらも存在がぴたりと張り付いているのです。「いる」は今しかないからです。

葉っぱだって  
石ころだって  
そこにあるだけで  
心を動かす力がある。  
それが "ある" という  
ことなんかな

原田大助

## 参考図書

中込照明, 『唯心論物理学の誕生』, 1998, 海鳴社

砂子岳彦, 『システムと生成』, 2004, アイザックアド

古東哲明, 『存在神秘の哲学』, 2002, 講談社現代新書